

かわらばん

第4号 2016年1月15日



一票で変える女たちの会 ミニ講座〈女性参政権70年を見つめる〉第1回

スポーツは女性の社会参加の力になり得たか

「人見絹枝」から「なでしこ」まで

来田享子（中京大学）

2015.8.20

はじめに

女性参政権を考えるこの場でスポーツを取り上げるのはなぜでしょうか。それは、社会一般と共通する問題がスポーツの世界にみられるからです。スポーツ界では、身体的な性差がパフォーマンスの差という形で目につくことによつて、平均的にみるとパフォーマンスが低いと見なされる女性が不平等を受け易いポジションにあります。この不平等を解消するために、戦前から様々な努力をした女性アスリートがいます。今日は、そのうち二人の女性を通して、彼女たちがどのような努力をしたのか、現在にも引き継がれた課題はどのようなことなのかを考えていきたいと思います。その二人とは、皆さんもご存じの女性だと思います。一人は前畑秀子さん。オリンピックで日本人女性として初めて金メダルをとった人です。もう一人は、さらに

時代を遡って人見絹枝さん。オリンピックに日本人女性として初めて出場し、八〇〇メートル走で銀メダルをとった人です。彼女たちはメダルをとったことによつて注目されがちですが、それ以上に、現在の私たちがもつと学ぶべきことを残してくれています。

人見絹枝さん以降、現在の日本では女性アスリートたちの活躍が大きく採り上げられています。その一方で、私たちが目にしている彼女たちの活躍は、社会を変える力に結びついていくでしょうか。今回のテーマを「力になり得たか」と疑問形にしているのは、私自身は「なり得ていない」と考えていることを意味しています。

「なぜ、なり得ていないか」という理由を考えると、人見絹枝さん以降も影響を与え続けている、いくつかの事柄に気づきます。なでしこジャパンのような活躍をする人たちが

が出てきて、メディアに大きく採り上げられている。だからといって、国会議員の女性比率が高くなるわけではないし、活躍した女性アスリートたちが旧態依然たる性別役割観を変え存在として採り上げられていくわけでもない……。そのような変えることができていないものは、いったい何なのだろうか、ということについても考えたいと思います。

スポーツと性別についての三つのとらえかた

このテーマを考える際には、性別をセックス、ジェンダー、セクシャリティーに区別してスポーツとの関わりを考える必要があります。

セックスは生物学的な性の違いとされますが、スポーツ界では基本的にこれが「二つに分かれるもの」としてすべての仕組みが作られています。最も分かりやすい例としては、トップアスリートの競技では、女性と男性が同じ土俵で競い合うことがありません。染色体の状態によつて、男性はこうですよ、女性はどうですよ、という一般的な型があるとされてきたことを物差しにし



て、二〇〇〇年までは性別確認検査というのを行ってきました。この検査で「あなたは一般的な女性の型に当てはまっています」と言われてしまうと、その人は女性カテゴリー、いわゆる「女子の部」とか「女子種目」に選手として出場することができなくなりました。このように宣告されることは、スポーツ選手である以前に、女性として生きてきた個人にとって、おそらく耐えがたいような大きな問題です。そうした問題があつて、現在は、特に検査が必要とスポーツ組織が考える場合を除いては、つまり「男性が女性だと偽って」フェアーではない競技が行われているのではないか、ということが疑われる場合を除いては、検査は実施されなくなりました。

けれども、最近では、スポーツは本当に性別を分けて競技すべきなのか、そういう競技は成り立つのか、

が問い直される必要が出てきています。スポーツをする選手の中にも、トランスジェンダー、性分化疾患の人が存在するわけで、医学的にも女性と男性はくつきり線引きできるわけではない、ということがわかつてきています。それでも、スポーツの現状としては、競技をするときに「標準的な男性に近い人」と「標準的な女性に近い人」とに区別して、つまり性別を分けてしか競技を実施することができていません。

スポーツで性別にかかわる不平等を考える時に壁になっている問題のひとつがこの点です。誰もが楽しむことのできる遊び文化としてのスポーツのはずなのに、この仕組みのせいで、選手として参加することができない人が生じてしまっています。

次に考えなければならぬのは、ジェンダーの視点からです。女らしさや男らしさで人間を区別しようとする考え方は、私たちに染みついています。昔から学校で人気のある男の子はスポーツができる、というイメージはあつたのではないのでしょうか。最近ではスポーツが得意でなくても、たとえば料理が上手だとか、

優しいとか、「草食系男子」という呼び方がありますが、そのような呼び方で昔とは違う肯定の仕方が出てきていますので、変わってきたところもあるのですが、両性の平等を考えるとときに、昔からの定番的な男らしさ・女らしさの問題としてのジェンダーとスポーツの関係を考えてみることは、ひとつの鍵になり得ます。

セクシュアリティの観点では、スポーツは、男性的なマッチョな筋肉を誇示する風潮や同性愛への嫌悪感（ホモフォビア）が示される場になりやすいと言われています。競技場でとばされる野次に同性愛を否定したり、嫌悪するような言葉が使われるとか……。先ほどもお話ししたように、生物学的な性、セックスによって人間を2つのグループに分け、さらに固定的な男らしさや女らしさのイメージに影響を与えるものになりやすいスポーツは、恋愛は男性と女性とするものだ、という異性愛主義をあたりまえのものとし、そうではない人間関係のあり方を排除する文化になってしまひやすいと考えられます。スポーツ界では、実態としての差別はなくなつてはいませんが、同性愛者への差別や同性愛を嫌悪する

る野次はなくななければならない、ということが少しずつ認知されてきています。二〇一四年に改訂されたオリンピック憲章では、あらゆる差別を認めないとする条文の中に、「性的指向にもとづく差別」が明記されました。

こうした流れを受けて、最近のロシアのソチで開催された冬季オリンピックの時には、ロシアに同性愛宣伝禁止法があり、実際にロシア国内で同性愛の方の人権が侵害されているというについて、国際オリンピック委員会（IOC）やオリンピックの参加国であるヨーロッパの国々が問題にしました。二〇二〇年に東京オリンピック・パラリンピック大会を開催することになっている日本でも、何らかの法的な手立てが必要になつてくると思います。そのことからすると、同性カップルを結婚に相当する関係と認め証明書を出すとした渋谷区の条例は、人権を拡大するものであつて、スポーツにも影響を与えることになるだろうと思います。

このように、スポーツの世界では基本的に身体を抜きにして考えることができないために、両性の身体



1920年アントワープ五輪金メダリストのスザヌ・ランラン（仏）

の違いに敏感であることが影響し、ジェンダーやセクシュアリティに関わる問題も発生しやすい、ということを見てきました。日本は比較的にスポーツが盛んで、メディアでもとりあげられます。ですから、身近な問題の中にも、社会全体の女性に対する不平等に、スポーツが根深く影

響を与えていく可能性があるということです。

近代スポーツの発展とジェンダー

私たちが体育の授業などで経験したり、テレビで見たりするスポーツは、イギリスの産業革命が起きた

一八〇一九世紀頃から盛んになり、ルールや組織が整っていきました。この時代に求められた人間像は、人間像といっても、それは主に男性を対象としたものでした。教育機関では、時代に求められる人間を育てるために、生徒たちにスポーツを奨励するようになりました。近代スポーツは、競争に勝つための勇気、忍耐、規律、協同、リーダーシップなどを備えた男性を育てるために役立つと考えられたわけです。そのようなわけで、近代スポーツは「男性原理」を反映する、と言われていました。

女性たちは、このような時代のニーズを受けたスポーツに後から参入し、活動をするようになりました。男性たちは、はじめ女性たちを排除しようとしたのですが、次第に女性たちにスポーツの人氣が定着し、無視できないほどの女性たちがスポーツに情熱を傾けるようになると、「女性たちもやっていいけれど、男性がやるのとは意味が違う」という、別の位置づけをするようになります。つまり、女性たちに対しては「スポーツをしてもいいけれども、それは、勇気や忍耐やリーダーシップのためではなくて、美しい姿勢を作ったり、

礼儀作法を学ぶためのものだ」という、異なる意味を女性スポーツに与えるようになったのです。このような「ダブルスタンダード」の名残をスポーツ界は今でも引きずっています。

近代スポーツへの女性の参画を求めて

そうして一九二〇年代になると、世界で最初の女性スポーツ組織である国際女子スポーツ連盟（会長・アリス・ミリア）が設立されました。この組織は、女性たちが自分たちの活動の場を得たり、自分たちのためのルールを作ったり、大会ができるようにするために社会に働きかけようとしていました。その典型的な活動が、オリンピック大会に女性の陸上競技種目を採用させようとするものでした。国際女子スポーツ連盟は、国際オリンピック委員会や国際陸上競技連盟を相手に運動を展開し、自分たちにも陸上競技などの大会が開催できるのだということを示すために、一九二二年から四年に一回、女性だけのオリンピック大会を開催しました。大会は、一九三八年まで五回開催されました。この女性たちの



国際女子スポーツ連盟を設立したミリア (Alice Milliat)
出典: Webster, F.A.M: Athletics of Today for Women, Frederic Warne & Co., Ltd: London and New York, 1930

運動において注目すべきは、彼女たちがスポーツへの女性の参加の拡大を主張するだけでなく、女性の組織を男性の組織と対等に認めてほしい、女性が審判や組織の役員になることを認めてほしい、と主張したことです。今から約一〇〇年前に、スポーツにおける女性の「参画」を求めている、ということになります。

日本の女性たちへの影響… 人見絹枝と前畑秀子がめざしたもの

日本では、まさにこの時代に見絹枝さんと前畑秀子さんが登場しました。彼女たちは海外遠征で世界の女性たちのこういう動きを肌で感じて、自分たちの国の女性たちにもそれを伝えることになります。人見絹枝さんの場合、彼女の書いた本な

どを読むと、日本ももっと変わらなければ、と明確に意識していたと言えます。

スポーツを通じてこうした女性たちが日本に登場したことは、私たちにとってメダルを取る選手が出てきたかどうか以上に重要なことです。ですが、現在でもなお、人見さんや前畑さんがオリンピックでメダルをとったことばかりに注目が集まり、彼女たちが国際社会における女性たち自身の権利を求める活動を肌で感じたことについては、あまり評価されていません。スポーツの歴史的な研究の中でも、学校時代に優秀だった、文才があったなどの、いわゆる文武両道といったイメージの評価は見かけますが、女性たちによる「スポーツへの参画」に関わったことは、注目されにくいと言えます。

私自身は、このあまり注目されてこなかった面に興味があったので、人見さんと前畑さんの人生について、次のようにまとめてみました。

まず人見さんは、まだ女性の体育教師が少なかった時代に、それをめざした教育を受けています。また、周囲には国際レベルの選手が男性しかいなかった中で、自分に合ったトレーニングや技術の研究を自分自身で行っていました。国際大会で得た経験を高等女学校の生徒たちに伝えるために講演していますが、その講演数、全国各地の高等女学校を訪れている状況は、長旅や複数の国際大会に出場する遠征の後では、命を削るものになったのではないかと思うほどのものでした。女性とスポーツをめぐる国際状況を伝えるだけでなく、陸上競技の実技の巡回指導も



人見絹枝 (出典: 人見絹枝著「ゴールに入る」一成社、1931)

行っていました。その一方で、新聞社では記者としても働いていました。さらに、日本女子スポーツ連盟という、日本初の女性スポーツ組織では、事務局長を勤め、国際女子スポーツ連盟など、海外のスポーツ組織とのやりとりを英語でこなしていました。

前畑さんがメダルをとったのは人見さんが銀メダルを獲得してから八年後です。彼女もやはり、トレーニング計画は自分で立て、講演も行っていました。特に、二四歳という若さでなくなった人見さんにはできなかったこととして、前畑さんが評価されるべきなのは、生涯、スポーツの指導者であり続け、自分自身が高齢になっても、現在という生涯スポーツのリーダーシップをとったことです。それぞれの活躍は、後



前畑秀子（出典：The XIth Olympic Games Berlin, 1936, Official Report）

世になつてからドラマにもなつたので、これによつて、彼女たちの人生を知つた方もいらつしやるかもしれません。

二人の人生を通して見てみると、メダルをとれる選手であつた側面よりも、社会の中のスポーツという分野で、リーダーとして生きたことが理解できると思います。

二人はそれぞれ、次のような名言も残しています。これらの言葉からは、二人の違いのようなものがかがえる氣もします。

努める者は何時か恵まれる。私は賢明でないことをよく知っています。然し愚かなりとも努力を続ける者が最後の勝利者になることを信ずる者です

人見絹枝

優勝できなかったら、帰りの船から飛び込んで死ぬしかない。しかし自分は泳げる。さてどうやって死ぬか。

前畑秀子

この言葉、名前を隠して「誰が言つたでしょう」と尋ねたら、男性選手を思い浮かべながら、あの人か、この人か、と考える人がいるのではないかと思います。彼女たちはステレオタイプな「女性らしさ」とは異なるイメージの、個としての自分を持つている人として生きたことが伝わってきます。

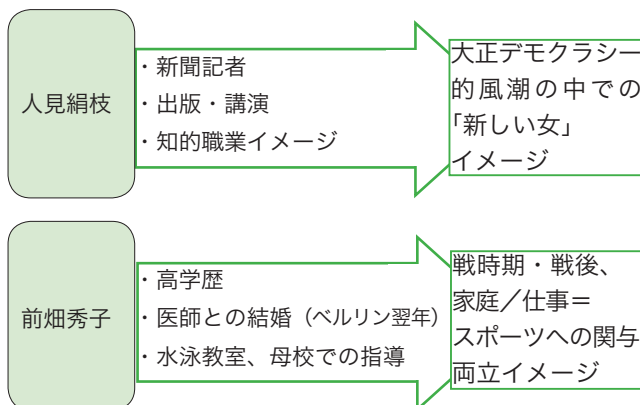
メダルをとつた選手ということだけでなく、彼女たちの人生をもう少し総合的な目で見ると、当時、ロールモデルとして非常に大きな役割を

女性スポーツの普及／振興への功績（未来への貢献）（来田、2014）

人見絹枝	・新種目への挑戦（800 m、三種、三段跳び） ・現役選手 兼 指導者 ・女子代表団の派遣→なでしこ JAPAN ・スポーツ組織者 ・女性の生涯スポーツの重要性を指摘	競技スポーツ
前畑秀子	・長命 ・結婚後も競技 ・結婚・出産・育児と行ったライフステージを超えてスポーツに関わる ・生涯スポーツの指導者	生涯スポーツ

果たしたのではなかったかと思われまふ。人見さんは大正デモクラシーの風潮が漂う社会の中で「これからの女性」「新しい女性」のイメージを、前畑秀子さんは水泳の指導を続けると同時に結婚・子育てもした「家庭と仕事の両立」イメージを提示していきまふ。残念なことに、人見さんは二四歳で亡くなつてしまふました。この影響は大きかつたと言わざるを得ません。私は、彼女がもつと長生きしていれば、日本のスポーツ界で女性がリーダーシップを発揮す

女性ロールモデルとしての影響（来田、2014）



ることができ環境がもつと早く整い、実際にスポーツ界を担う女性のリーダーがもつと早く出てきたのではないかと考えています。

当時、スポーツをする女性たちはまだ少なかつたですし、高等女学校で少し課外活動として行つて、卒業した後は、スポーツから縁遠くなつてしまふ……、そういう時代だったのですが、女性たちにスポーツを普及・振興したという意味でも、二人の貢献はもろんだきいと言えます。ただ、残念なことに、こ

の二人の後につながる人が直接的には登場しづらい社会が来てしまいましたが。第二次世界大戦です。この時期のスポーツは、戦時体制下での体力増強論、女性に対する「産めよ増やせよ」のスローガンを肯定したり、男性・女性にかかわらず精神論を支える活動になっていったと言わざるを得ません。

戦後のオリンピックにおける 日本人女性選手の活躍

戦後、日本の女性スポーツ選手がオリンピック大会に出場した人数についてみると、世界の中では、意外かもしれませんが、かなり良い状況なのです。みなさんの記憶に残る女性たちとしては、一九六四年東京大会のバレーボール選手、いわゆる「東洋の魔女」ではないでしょうか。この活躍は、七〇年代になって、女性スポーツの組織化が進むための起爆剤のような役割を果たしました。このように組織化とは何でしょうか？

そうです、ママさんバレーです。女性のバスケットボールも組織化されたのですが、おもしろいことに「ママさんバスケットボール」ではなく

「家庭婦人バスケットボール」という名称が組織では使われています。この社会現象とも言える女性たちのスポーツ熱は、九〇年代くらいから、少し頭打ちになったという研究があります。なぜでしょうか？ 実は、「ママさん」とか「家庭婦人」という名称が、ハードルになってしまいました。つまり、私はママさんじゃないから入れないんじゃないか、とか、あの人は家庭婦人じゃないから入ってもらえないんじゃないか、というような言葉のイメージが女性たち同士の間に壁を作ってしまう…。あるいは、家庭婦人バスケットボールでは、家族が自宅に帰ってきて夕食を作る時間は避けて練習する、ということが定着すれば、じゃあ、仕事をしている人は全然練習に行かないじゃないか…、というようなことが起きてくるわけです。

家族イメージの変化や社会における女性の役割の変化に少ずつ影響を受け、東京オリンピック後に盛んになった女性スポーツの組織化にブレーキがかかっていった一方で、次第に、様々な競技で活躍する女性選手たちが登場するようになります。たとえば、九〇年代以降、水泳の岩

崎恭子さん、フィギュアスケートの伊藤みどりさん、スピードスケートと自転車競技の夏冬両方のオリンピックに出場した橋本聖子さんなど、多くの女性が活躍し、最近の女性選手たちの活躍へとつながっていきました。ただし、この中で引退後も社会のリーダーとしての女性のモデルになった人、「社会に参画した人」と言ってもいいかもしれません。が、そういう人を挙げてみると、たとえば国会議員になったのは体操の小野清子さん、橋本聖子さん、柔道の谷亮子さん。いずれも国会議員になった女性アスリートとして知られています。企業家とか、仕事と家事・育児を夫とともに両立している、という元女性アスリートは、あまり話題になったことはありません。コーチなど、女性指導者は少ずつ出てきているのですが、引退後にアスリートとしての経験を活かしながら一般社会でリーダーシップを発揮する人は、決して多いとは言えない状況です。そもそもスポーツ界全体が、社会一般への関心、政治とか経済とか、政策とか、そういったものに関心を持っていないとの批判を受けたこともあります。そういう批判があ

ることからすれば、先日の新国立競技場の問題では、元トップアスリートたち数名がメディアを通じて声を上げたというのは、良い傾向なのではないかと思います。女性では有森裕子さんが声を上げましたね。

日本の女性選手の活躍には どのような特徴があるか

少し話が横道にそれましたが、戦後のオリンピックにおける日本の女性選手の活躍の特徴は、他の国では女性への普及が進みにくい格闘技系のスポーツや、サッカーやフットボールでの活躍が目立つことです。格闘技系のスポーツや重量挙げなどでは、父親が元選手というケースが多く、たぶん息子だったらやらせただろうし、オリンピックの競技になつていないけれども、娘がやるのを応援しよう、ということだったのかもしれない。そうして登場してきた「男性型の競技」「女性種目が大会に採用されていない競技」でプレーする女性選手たちの存在があつて、二〇一二年のロンドン五輪では男女の実施競技が同じになりました。まだ種目数や階級数では男性の

方が多い状況にあるため、現在はこれを改善することが推奨されています。

海外では、いわゆる「男性型の競技」に対する抵抗はかなり強い傾向

があります。日本の場合、社会にずっと受け入れられケースがあるのは、ともかくメダルがとれる、ということなのではないかと思っています。メダルがとれば何でもいい、というか……。人見さんのときも、前畑さんのときも、女性が競技をするなんて、という社会の風潮が変わっていった背景には、彼女たちがメダルをとったことがあったように思われます。この傾向は、女性のスポーツに関することだけではなくて、メダルがとれば何でもOKという傾向をメディアが盛り上げてしまっています。努力をした選手がどれだけ他にいても、メダルよりも大切な価値がスポーツにあったとしても、メダルをとった選手ばかりが持てはやされ、しかもそれが流行現象的にしかとらえられない。女性選手の活躍が大きくとりあげられる状況があったとしても、こういう危うさがこの国にはあるように思います。メディアはメダルをとることのみが読者・視

聴者を獲得する手立てだと考えているのでしょうか。

参加の拡大やメダル獲得は 女性参画を促進するか

次にリーダーシップという視点から見てみます。最近三回の夏季オリンピックを見ると、女性アスリートの参加は五〇%前後あるにもかかわらず、代表団の中の役員における女性の割合は一二〜一五%です。この役員の中には、看護師が含まれており、看護師は女性が多いので比率は上がりますが、実質的に監督・コーチ・トレーナー・競技団体の役員など、男性と同じ立場に立っている女性は非常に少ないといえます。参考までに、国内オリンピック委員会の意志決定機関における女性割合を世界の地域別にみたデータを示しておきます。アメリカ大陸(四二カ国中一八カ国が調査に回答)では八・七〜三二・三%、オセアニア(一七カ国中一二カ国が調査に回答)では一二・九〜三九・三%となっています(二〇一〇年のデータ)。日本オリンピック委員会の場合、二〇一五年現在二九名中三名ですので一〇%を

切っています。三〇%を超える国もあることからすると、日本のスポーツ組織における女性の参画の状況は決して良いとはいえない状況で、これは女性選手の活躍だけを見ていたのではわからないだろうと思っています。

もう一つ、データを示しておきたいと思います。ロンドン大会でメダルを獲得した上位一〇か国を見ると、日本は六位に位置します。しかし、GGGI(ジェンダーギャップ指数。国際組織が女性の社会進出を計る指標)は一〇一位です。女性議員比率は一二九位で、メダル獲得上位一〇カ国のうち最下位、次いでロシアが一〇一位、韓国が九三位です。どれだけ女性がメダルをとっていても、残念ながら社会参画とは乖離していると言わざるを得ません。

こういう現象をもたらす理由を考えると、選手に対して社会がどういう「らしさ」を求めているのか、というところにも手がかりがあるのではないかと思っています。次の写真をご覧ください(ここでは不掲載)。アメリカの女子サッカー選手と、「なでしこ」ジャパン、日本の男子のサッカー代表の写真を並べてあります。

どのチームもブルーのウェアを着ていますが、印象としてどの人たちが近いでしょうか。感じ方はいろいろあるだろうと思いますが、女性というジェンダーの表象という点では、アメリカの選手は髪を伸ばしたり、お化粧をしたりして「私たちは女性です」という雰囲気を出している。一方で、「なでしこ」はショートカットの選手の割合も多くて、少年のようにも見えます。この観点では、アメリカの女子選手のイメージと日本の女子選手のイメージよりも、日本の男子選手と女子選手のイメージのほうが近いという感じがするともいえます。座り方も日本は男女が同じです。

アメリカの場合、いくつかの調査では、「女性らしい」髪型や服装を際立たせようとする背景に「自分はレズビアンではない」ということを表わすためだと女性選手が証言している事例が明らかにされています。男性的なジェンダー・イメージによつて、レズビアンだという噂が広がったり、そういう印象を持たれしてしまうと、スポンサー獲得に影響が出るということです。日本では、選手たちはあまりそういうことを気に

しないでよい状況があると思います
が、そのかわりに、AKB48がアイ
ドルとしてもはやされる空気に影
響を受け、雑誌のグラビア等ではア
スリートとしてではなく、アイドル
化されて表象されるという傾向も
うかがえます。川澄選手はネット上
で「かわいい」などと評価されますが、
本来は選手として評価されるべきで
あって、アイドルと同じ基準で評価
されるべきではないはずです。

メディアの表象の問題点
コマーシャルに見るスポーツ選手と

性別役割

「谷亮子、ママでも金」という新
聞の見出しは、ずいぶん話題になり
ました。でも「パパでも金」という
見出しは目にしたことがありませ
ん。それからもう一つ確信的なコ
マーシャルだと思うのは、二〇一五
年二月に制作された味の素のCMで
す。このCMのコンセプトでは、男
性スポーツ選手はただサッカーを
がんばる、夢中になる、というだけ
で、全く自己管理もできないような
人間像として表現されてしまってい
ます。このCMにあるような、家族

のことも忘れるほど競技に夢中にな
っているアスリートであれば、自
分の食べるもののメニューは自分で
わかっているなければダメなのに、で
す。そして、そういうアスリートを
支えるために、食事を作るのはいつ
も妻です、それは妻役割としてあた
りまえです、それが愛です、という
表現がされてしまっています。じゃ
あ、女性スポーツ選手の食事は誰が
作るんでしょうね、とも思っていし
まうわけです。

つい最近も、女性の性別役割分
業を固定化し、女性に「家事も育児
も仕事も」があたりまえであるかの
ような生活ぶりを表現するCMが
あったのですが、このCMについて
は瞬く間にネット上で炎上し、今は
動画が削除されていて、見るのは難
しくなっています。性別役割分業を
固定化させたり、不平等な状態を「あ
たりまえ」だと表示することによつ
て、潜在させていくかもしれない情
報は、かなりあります。そうした情
報に自分たち自身が気づくセンサ
ーを育てることができているかどう
か、は、とても大切です。それだけ
でなく、おかしいと感じたときに声
をあげることができるかどうか、も

問題です。一見、女性が活躍してい
るように見えることの裏側に沢山の
ことがあり、見逃していることも多
いのではないのでしょうか。政治の問
題は議員数などによって示されやす
いのですが、スポーツの場合はノー
チェックのままスルーされてしまう
ことも多いような気がします。その
意味では、スポーツ界の男女共同参
画、スポーツを通じた表象は、実質
的な意識の変化を読み取る指標にな
るかもしれません。

少しずつですが変わってきたか
な、と思うCMもあります。少なく
とも、以前はなかったな、という印
象のもの。ひとつは、生命保険会社
のCMですが、フィギュアスケート
の女性選手を「強さ」のイメージと
して扱っているものです。もうひと
つは、東日本大震災直後に流された
飲料メーカーのCMですが、日本代
表のサッカー選手たちが男女両方と
も、ほぼ同じ感じでプレーしている
場面が用いられています。男子選手
が雨でずぶ濡れになりながらプレー
しているシーンがありますが、女子
選手も同じように雨の中をプレーす
るシーンが用いられている。これ、
別々の試合なんだと思いますが、わ

ざわざ雨の日の試合をどちらも選ん
できて、困難さの中でも力強くプ
レーする印象を与えようとしている
のではないかと思います。

このように、これまでは男性選手
に与えられがちであったイメージを
女性選手に与えたり、男女両性の選
手に同じ役割を与えるCMが散見さ
れるようになっていきます。今から七
年くらい前の学会発表では、金メダ
リストの高橋尚子さん、一緒に走っ
たら男性であつてもまあ勝てないよ
うな選手なのに、CMに起用された
ら、犬を連れて散歩している映像が
使われている……という、笑い話の
ようなCMを研究で取り上げた方が
いました。

おわりに

スポーツは、女性選手の活躍が取
り上げられることによつて、社会の
両性の平等に、明るい見通しを与え
てくれているように見えるかもしれ
ません。しかし、元来は遊びの世界
であるということの性格上、人権保
障や社会への男女共同参画などの実
質的变化が遅れてしまう傾向もある
のではないかと思います。いわゆる

私的な活動の範疇に入る部分が多いために、法律や政策によって変化を促しづらい、という側面があるのではないかと思っています。しかし、遊びの世界、私的な活動だからこそ変えていける、という部分もあって、遊びの世界ですら人権が保障されなければ、どうして一般社会で保障されるのかともいえます。そういう風に考えれば、人権保障や両性の平等ということに関しても、実は最も早く変化が促されるべき領域、場ではないかと思っています。スポーツをする人もしない人も、ただ「勝った」「頑張ったね」「感動した」でなく、今日お話したような事柄について、「本当？」「それでいいのかな？」という目で見るようにすること、スポーツという世界で始められることが多ければ多いほど、社会が変わるスピードも速くできるのではないかと思います。

メダルを多く獲得している国は、女性の参画が進んでいる？

表 2012 年ロンドン夏季五輪におけるメダル獲得数上位 10 カ国の GGGI（世界男女格差指数）および女性議員比率

国名	2012 GGGI	女性議員比率		参加選手数		女性選手比率	メダル獲得総数 / 順位
				女子	男子		
ドイツ	13 位	21 位	36.5/27.5	218	174	55.6%	44 (5 位)
イギリス	18 位	64 位	22.6/23.4	262	279	48.4%	65 (4 位)
オーストラリア	20 位	48 位	26.0/41.3	224	186	54.6%	35 (7 位)
アメリカ	22 位	84 位	18.3/20.0	269	261	50.8%	104 (1 位)
フランス	57 位	47 位	26.2/22.5	147	183	44.5%	34 (8 位)
ロシア	59 位	101 位	13.6/8.0	228	208	52.3%	81 (3 位)
中国	69 位	61 位	23.4/ -	225	171	56.8%	88 (2 位)
イタリア	80 位	30 位	31.4/29.0	123	162	43.2%	28 (9 位)
日本	101 位	129 位	8.1/16.1	137	156	46.8%	38 (6 位)
韓国	108 位	93 位	15.7/ -	113	135	45.6%	28 (10 位)

(来田、2014)



『一票で変える女たちの会』かわら版
* ネットやメールを利用されない方には印刷版をお届けしています。

ネットでご覧になる方も、ぜひ印刷してご友人・知人の方に紹介してください。

★投稿大歓迎！

本や映画の紹介、地域での活動報告、選挙や地域の政治の動き、情報、ご意見、なんでもお寄せください。(一本について二〇〇字〜一六〇〇字)

投稿先:

1pyodekaeru@gmail.com

郵便の場合

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1の1

東京ボランティア・市民活動センター

メールボックス No. 45

FAX: 03-5684-1412